音読

日本の名文24

君死にたもうことなかれ

（旅順の攻囲軍にある弟宗七を歎きて）

与謝野晶子

ああ、弟よ、君を泣く、
君死にたもうことなかれ。
末に生れし君なれば
親のなさけは勝りしも、
親は刃をにぎらせて
人を殺せと教えしや、
人を殺して死ねよとて
二十四までを育てしや。

堺の街のあきびとの
旧家を誇るあるじにて、
親の名を継ぐ君なれば、
君死にたもうことなかれ。
旅順の城はほろぶとも、
ほろびずとても、何事ぞ、
君は知らじな、あきびとの
家のおきてに無かりけり。

君死にたもうことなかれ、
すめらみことは、戦いに
おおみずからは出でまさね、

参考①青空文庫
②鉄幹晶子全集3勉誠出版

互に人の血を流し、
獣の道に死ねよとは、
死ぬるを人の誉とは、
おおみこころの深ければ、
もとより如何で思されん。

ああ、弟よ、戦いに
君死にたもうことなかれ。
過ぎにし秋を父君に
おくれたまえる母君は、
歎きのなかに、いたましく
我子を召され、家を守り、
安しと聞ける大御代も
母の白髪は増さりぬる。

暖簾のかげに伏して泣く
あえかに若き新妻を、
君忘るるや、思えるや。
十月も添わで別れたる
少女ごころを思いみよ。
この世ひとりの君ならで
ああまた誰を頼むべき。
君死にたもうことなかれ。

※音読の便を考え、表記などを改めました。

与謝野晶子

一八七八～一九四二。大阪生まれ。日本の歌人、作家。

上記の詩は、一九〇四年に雑誌『明星』で発表。日露戦争が一九〇四年二月に開戦している。その年の九月にこの詩は発表された。

日清戦争の勝利の勢いを得て、戦争遂行の論陣が張られ、新聞も開戦論一辺倒であったといわれている。

ただ、与謝野晶子がつねに反戦思想の持ち主だったことにはならず、事実太平洋戦争時は、戦争推進の歌を多数残している。

なお、弟籌三郎は、戦争で死ぬことなく帰還し、終生晶子とは交流があったという。

（詩の大略）

わが弟よ、死んではならない。末っ子で愛情豊かに育った君は、親が人を殺せと教えただろうか？堺の町の商人の後継ぎとして生まれたのだ。旅順が滅びようがそうでなかろうが、何が関係あろうか？

弟よ、死んではならない。天皇陛下は自ら戦争に行かれないではないか。まさか、お互いに殺しあって、死ぬ事こそ名誉などとはお思いにはなるまい。

弟よ、死んではならない。秋に父親に先立たれた母が、嘆いている様子は痛ましい。ご安泰の陛下の御代だと思っていたこの時代に、わが子を召されて、白髪が増えるばかり。

暖簾の陰で泣いているのは、まだうら若い君の若妻ではないか。その妻の心を思いやってほしい。君だけを頼りとしているのだから。

弟よ、決して死んではならない。

※弟籌三郎は、父の名を継いで、宗七となっている。